

《マオメット 2 世》 作品解説

—— 改革的オペラ・セーリアの頂点をなす名作 ——

水谷 彰良

本稿は日本ロシーニ協会の演奏会「《マオメット 2 世》 抜粋」のために書き下ろした作品解説。長文のため演奏会プログラムには要約を掲載し、原文の PDF 版をホームページにアップします。

(2013 年 9 月作成 / 2014 年 6 月修正)

マオメット 2 世 *Maometto secondo* ¹

劇形式 2 幕のドランマ・ペル・ムジカ (Dramma per musica in due atti)

台本 チェーザレ・デッラ・ヴァッレ [ヴェンティニャーノ公爵] (Cesare Della Valle [duca di Ventignano], 1777-1860)

第 1 幕 : 全 6 景、第 2 幕 : 全 6 景、イタリア語

原作 前記チェーザレ・デッラ・ヴァッレ自身の未出版の悲劇『アンナ・エリゾ (*Anna Erizo*)』 (1820 年執筆、初版 : 1823 年トリノー)

作曲年 1820 年 5 月以降 [不明] ~ 11 月 (解説参照)

初演 1820 年 12 月 3 日 (日曜日)、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo)、ナポリ

人物 ①パオロ・エリッソ Paolo Erisso (テノール) ……ネグロポンテ島を治めるヴェネツィア人の司令官

②アンナ Anna (ソプラノ) ……パオロ・エリッソの娘

③カルボ Calbo (コントラルト) ……ヴェネツィア人の指揮官

④コンドゥルミエーロ Condulmiero (テノール) ……指揮官の一人

⑤マオメット 2 世 Maometto II³ (バス) ……オスマン・トルコ皇帝 [註]

註 : 史実のオスマン帝国第七代スルタン、メフメト 2 世 (Mehmet II, 1432-81 [在位 1444-46, 51-81])。他の人物の原型と歴史的背景については解説参照。

⑥セリモ⁴ Selimo (テノール) ……マオメット 2 世の友人

他にネグロポンテの女、回教徒の戦士、回教徒の娘、ヴェネツィアの兵士、回教徒の兵士たち (以上、合唱)

初演者 ①アンドレア・ノッツァーリ (Andrea Nozzari, 1775-1832)

②イザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran, 1784-1845)

③アデライデ・コメリ (Adelaide Comelli [本名 : アデル・ショーメル Adèle Chaumel], 1794-1874)

④ジュゼッペ・チッチマツラ (Giuseppe Ciccimarra, 1790-1836)

⑤フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853)

⑥ガエターノ・キッツォーラ (Gaetano Chizzola, ?-?)

管弦楽 全集版未出版につき確定しないが、ロシーニョ『ロシーニ事典』は、2 フルート / 2 ピッコロ、2 オーボエ、2 クラリネット、2 ファゴット、4 ホルン、2 トランペット、3 トロンボーン、セルペントーン、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、鐘 [campanelle]、ハーブ (N.3 と N.11 のみ)、弦楽合奏、舞台上のバンダとする。⁵

演奏時間 第 1 幕 = 約 85 分 第 2 幕 = 約 90 分

自筆楽譜 ロシーニ財団、ペーザロ (全曲ではないが、多くのナンバーが含まれる)。他にも自筆素材がイギリスとアメリカに所蔵 (GR-Lbl 及び US-NYp)。

全曲初版 Artaria, Wien, 1823. (ピアノ伴奏譜初版。同年 Milano, G. Ricordi 社もピアノ伴奏譜を出版)

全集版 I / 31 (未成立)

楽曲構成 (全集版未出版につき、ロシーニ・オペラ・フェスティバル [以下 ROF と略記] 2008 年プログラムの楽曲表に準拠。1985 年及び 93 年プログラムとの異同は構成に関してのみ註で示す)

【第 1 幕】

N.1 導入曲 〈エリッソよ、あなたの命により集まりました Al tuo cenno, Erisso, accolti〉 (エリッソ、コンドゥルミエーロ、カルボ、合唱)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ 〈カルボ、お前は私を憎んでいるだろう Calbo, tu m'odi〉 (エリッソ、カルボ)

- N.2 アンナのカヴァティエーナ〈ああ！虚しくも悲しげな目に Ah! che invan sul mesto ciglio〉（アンナ）
— カヴァティエーナの後のレチタティーヴォ〈慈悲深い神様！Pietoso ciel!〉（アンナ、エリッソ、カルボ）
- N.3 シェーナ〈いいえ、黙っていられません No, tacer non deggio〉とテルツェットーネ〈ああ！なんという稲妻が Ohimè! qual fulmine〉（アンナ、カルボ、エリッソ、合唱）
註：1985年と93年 ROF プログラムは a~e 五つの構成単位に区分したが、2008年のプログラムで削除された。⁶
- N.4 合唱〈剣により、火により Dal ferro, dal foco〉とマオメットのカヴァティエーナ〈皆の者、立ってくれ、かくも良き日に Sorgete: in sì bel giorno〉（マオメット、合唱）
- N.5 シェーナ〈まだ完全になされていない Compiuta ancora del tutto〉と第1幕フィナーレ〈正義の神よ、これはなんという責め苦！Giusto Ciel, che strazio è questo!〉（アンナ、カルボ、エリッソ、セリモ、マオメット、合唱）
註：1985年と93年 ROF プログラムは N.5 の区分名称を「シェーナ、合唱、三重唱、フィナーレ I」とし、a~c 三つの構成単位に区分したが、2008年のプログラムで変更・削除された。⁷

【第2幕】

- N.6 導入曲〈狂ってますわ、花の盛りの年齢で È follia sul fior degli anni〉（合唱）
- N.7 シェーナ〈お黙りなさい。ああ、悲しい！ Tacete. Ahimè!〉、アンナとマオメットの二重唱〈アンナ…泣いておるのか？ Anna...tu piangi?〉（アンナ、マオメット）
- N.8 シェーナ〈だが…何の騒ぎだ？ Ma...qual tumulto ascolto?〉とマオメットのアリア〈勇敢な申し出に All' invito generoso〉（マオメット、セリモ、アンナ、合唱）
- N.9 シェーナ〈ついてこい、ああ、カルボ Sieguimi, o Calbo〉とカルボのアリア〈心配無用です：卑しい感情に Non temer: d'un basso affetto〉（カルボ、エリッソ）
- N.10 シェーナ〈ああ、なんと甘く心に Oh, come al cor soavi〉⁸と三重唱〈このいまわの時に In questi estremi istanti〉（アンナ、カルボ、エリッソ）
- N.11 シェーナ〈やっとなすべきことを半分終えました Alfin compiuta è la metà dell'opra〉と第2幕フィナーレ〈不幸なお方！あなたに残されたのは逃げることだけ Sventurata! fuggir sol ti resta〉（アンナ、マオメット、合唱）

物語 [時の指定なし（史実では1470年7月）。場所はネグロポンテ]

【第1幕】

マオメット2世率いるオスマン・トルコ軍に包囲されたネグロポンテ島[註]の宮殿。マオメットから明日までに開城せよと最後通牒を付きつけられたヴェネツィア軍の司令官パオロ・エリッソが、指揮官を集めて戦略会議を開く。その一人コンドゥルミエーロは降伏を提案するが、徹底抗戦を主張するカルボに他の指揮官も同調し、明日は最後まで戦おうと全員で誓う（N.1 導入曲）。会議が終わり、エリッソはカルボを娘アンナの部屋に誘う（レチタティーヴォ）。

アンナが自室で不安にかられていると（N.2 アンナのカヴァティエーナ）、エリッソがカルボを連れて現れ、カルボがアンナを妻に望んでいると話す。その言葉にショックを受けたアンナが、かつてコリントスで出会ったミティレーネの領主ウベルトへの愛を告白すると、エリッソは、ウベルトは自分と一緒に船にいたので偽者だ、と非難する。思いがけぬ話に3人で驚いていると大砲の音と叫び声が聞こえ、アンナは教会に走り去る。教会前の広場では女たちが恐怖に震えている。そこに来たアンナは裏切り者が城門を開いたと知り、跪いて神に慈悲を請う。エリッソとカルボが駆けつけ、夜明けにマオメットの軍勢が攻め込むので教会に隠れるよう促す。エリッソはアンナに自害用の短剣を渡し、女たちは兵士の夫と別れを悲しむ（以上、N.3 シェーナとテルツェットーネ）。

乱入したトルコ軍がヴェネツィア兵を追走するとマオメットが現れ、回教徒の兵士たちを前に世界征服を宣言する（N.4 合唱とマオメットのカヴァティエーナ）。マオメットは忠臣セリモに追撃を指示し、かつてギリシアを視察したと話す。そこに兵士たちから「敵の司令官を捕らえた」との報せが届く。エリッソとカルボが連れて来られ、エリッソの名を聞いたマオメットは「かつてコリントスの司令官だったか？」「娘はいるか？」と問い質し、要塞を明け渡せば全員の命を助けると提案する。だがエリッソとカルボは拒否し、怒ったマオメットは兵士に二人の拷問を命じる。そこに教会からアンナと女たちが駆け込んでくる。マオメットとアンナは互いに気づき、アンナの発した「ウベルト！」に一同驚く。アンナはとっさにカルボを兄と偽って短剣を取り出し、「父と兄を解放しなければここで死ぬ」と迫る。マオメットは2人の鎖を解き、アンナに妃となって自分と暮らすよう求める。その言葉に心を乱すアンナを見て、全員が驚き戸惑う（以上、N.5 シェーナと第1幕フィナーレ）。

[註] ギリシア東岸に位置する島。ヴェネツィア共和国の植民地で東方貿易の拠点。コンスタンティノーブルがメフメト2世によって陥落後、エーゲ海の最も重要な基地になっていた。

【第2幕】

マオメットの贅沢な天幕の中。回教徒の侍女たちがアンナに高価な贈り物を差し出し、恋に心を閉ざさぬよう説く（N.6 導入曲）。侍女たちを黙らせたアンナが逃げ道を探していると、マオメットが現れる。マオメットはアンナに求愛し、私と結婚してイタリアの女王になれば父や兄とも一緒に暮らせる、と説く。アンナは彼への愛を認めながらも、「天と父の意に反するよりも死を選びます」と答える（N.7 シェーナ、アンナとマオメットの二重唱）。遠くから騒ぎが聞こえ、天蓋が開いて広場にあふれる兵士たちを見たマオメットは、アンナに彼女の父と兄の安全を保証し、その証しに皇帝の印璽 [suggello] を与える。そして兵士たちを鼓舞し、高らかに出陣を宣言する（N.8 シェーナとマオメットのアリア）。

教会の地下墓所。エリッソがカルボを地下に導き、妻の墓に話しかける。アンナを罪深い娘と嘆くエリッソにカルボは、「彼女は自分の身の安全のために卑劣な愛を選んだりはいしません」と言って励ます（N.9 シェーナとカルボのアリア）。そこにアンナが現れ、マオメットの印璽を渡して死の覚悟を伝え、母の墓前でカルボと結婚の契りを結ぶ。苦悩する3人は「次に会う時は…天国で」と約束して別れる（N.10 シェーナと三重唱）。

独り残ったアンナは、「あとは自分が生贄になるだけ」と死を覚悟する。そして祈りを終えた女たちと墓所で合流し、ヴェネツィア軍の勝利を知って喜ぶが、なお死を甘受しようと決意する。そこにトルコ軍の兵士たちが乱入し、「私を切りなさい」と胸を差し出すアンナの気高い姿にたじろいでいると、マオメットが現れる。印璽の返還を求めマオメットにカルボとの結婚を告げたアンナは、「母の遺灰が私の血を拾います」と言って短剣を胸に突き刺し、息絶える。その光景に一同愕然として立ちすくむ（N.11 シェーナと第2幕フィナーレ）。

解説

【作品の成立】

1819年12月26日にミラーノのスカラ座で《ビアンカとファッリエーロ》を初演したロッシーニは、翌1820年1月12日（または以前）に活動拠点のナポリに帰還し、サン・カルロ劇場の音楽監督としてガスパーレ・スポンティエーニ作曲《フェルナンド・コルテス（*Fernando Cortez*）》（《フェルナン・コルテス、またはメキシコ征服（*Fernand Cortez, ou La conquête du Mexique*）》[1809年パリ・オペラ座初演]のイタリア語版。伊語台本はジョヴァンニ・シュミットによる）の稽古に携わり、2月4日に初演を迎えた（7回上演）。そして3月の《エジプトのモゼ》再演に際して楽曲の差し替えを行い、四旬節にサン・カルロ劇場で予定したピエートロ・ライモンディ（Pietro Raimondi, 1786-1853）作曲《バビロニアのチーロ（*Ciro in Babilonia*）》（初日は3月19日）の上演準備に関与するかたわら聖ルイージ大信徒会の荘厳ミサ用に《グローリア・ミサ（*Messa di Gloria*）》を作曲した（3月24日ナポリのサン・フェルディナンド教会初演）。

その頃にはすでに、ルッカのジリーオ劇場（Teatro del Giglio）のための新作オペラを求められていた¹⁰。これはルッカの支配者マリア・ルイーザ・ボルボーネ（Maria Luisa di Borbone, 1782-1824）が秋に予定した息子カルロ・ルドヴィコ（Carlo Ludovico, 1799-1883）とマリア・テレザ・ディ・サヴォイア（Maria Teresa di Savoia, 1803-79）の結婚祝いにオペラ・セリアを求めたもので、カルロ・カラファ・ディ・ノーヤ（Carlo Carafa di Noja, ?-?) を仲介者とする依頼であった（結局ロッシーニは約束を果たさず、この仕事を放棄することになる）。5月25日にはロッシーニが新作台本を受け取ったことを仄めかす記事が『両シチリア新聞（*Giornale delle Due Sicilie*）』に掲載され、これが《マオメット2世》を指すものと推測されているが¹²、ルッカと関連した情報の可能性もある。ちなみにロッシーニはこの件で急遽ルッカに行くことになり、バルバーニアはそのためのパスポート発行を5月19日にノーヤに求めたが¹³、ロッシーニのルッカ行きを証明する資料は無いようだ。

《マオメット2世》の台本作者となるヴェンティニャーノ公爵チェーザレ・デッラ・ヴァッレ（Cesare Della Valle [duca di Ventignano], 1777-1860）は貴族の劇作家で、ナポリの王立諸劇場の経営陣の一人でもあった。彼が1830年に出版した全3巻の劇作集には『アンナ・エリーゾ（*Anna Erizo*）』に先立つ作品として『イッポリト（*Ippolito*）』（1813年）、『アウリスのイフィジェーニア（*Ifigenia in Aulide*）』（1816年）、『タウリスのイフィジェーニア（*Ifigenia in Tauride*）』（1817年）、『メデーア（*Medea*）』（1818年）が掲載されている。『アンナ・エリーゾ』は1820年に執筆され、原作はラディチョッティによってヴォルテールの『マオメ [マホメット]（*Mahomet*）』とされたが、ブルーノ・カーリの研究で否定されている（1972年の論文）。

オペラの主人公マオメット2世は史実のオスマン帝国第七代スルタン、メフメット2世（Mehmet II, 1432-81 [在位1444-46, 51-81]）で、1453年にコンスタンティノープルを攻略して東ローマ帝国を滅ぼした皇帝として知られる。その後遠征を重ね、1462年にはヴェネツィア共和国領レスボス島を占領、同じくヴェネツィア領のネグロポンテ島（ギリシアのエウボイア島）を1470年に占領してオスマン帝国に組み入れた。『アンナ・エリーゾ』は1470年6月下旬～7月のネグロポンテ攻略（とりわけ落城直前の7月11日からメフメット2世が入城する14日まで）の史実を基に、メ

フメト 2 世 [マオメット 2 世] 以外の人物も、パオロ・エリッツォ (Paolo Erizzo, 1411-70?) とその娘アンナ (Anna Erizzo, ?-?)、エリッツォと共に殺害されたアルヴィーゼ・カルボ (Alvise Calbo, 1404 頃-70?)、ジョヴァンニ・ボンドゥミエール (Giovanni Bondumier, 1417 頃-70?) など、パオロ・エリッツォ、アンナ、カルボ、コンドゥルミエーロの原型に当たる人物が実在した¹⁴。但しマオメットとアンナの恋、カルボとアンナの結婚などの筋立ては想像の産物で、デッラ・ヴァッレが何を原本にしたかは不明ながら、同じ題材の劇にヴィンチェンツォ・アントーニオ・フォルマレオーニ (Vincenzo Antonio Formaleoni, 1752-97) 作の悲劇『アンナ・エリッツォ、またはネグロポンテの没落 (Anna Erizzo, ossia La caduta di Negroponte)』(ヴェネツィア、1783 年刊)がある。

ロッシーニはデッラ・ヴァッレの草稿に魅せられて台本化を依頼し、エリーゾ (Erizo) がエリッソ (Erisso) となったのもロッシーニの求めによるものと思われ、デッラ・ヴァッレ劇の初版 (トリノ、T. vedova Pompa e figli, 1823.) は『アンナ・エリーツィオ (Anna Erizio)』、その後の出版では『アンナ・エリーゾ (Anna Erizo)』と題されている。だが、両者がナポリ在住のため書簡のやりとりがなく、完成台本がいつロッシーニに渡されたかなどを詳らかにするドキュメントは残されていない。

当初の初演予定は 9 月であるが¹⁵、流動的なナポリの政治情勢がこれをさらに遅らせたと考えられている。スペインでの立憲革命¹⁶を受け、ナポリでは炭焼き党 (カルボネリア carboneria : 19 世紀初頭にナポリ王国で結成された政治的秘結社) とフリーメイソンの活動が活発になり、7 月 1 日深夜に炭焼き党が蜂起したからである。権力奪取をはかるミュラ派の司令官グリエルモ・ペーペ (Guglielmo Pepe, 1783-1855) に率いられた自由主義者たちが同月 9 日にナポリに入城、ロッシーニがその際の市街戦で一国民衛兵として革命側に奉仕したとする伝記作者もいるが、事実とは見なしがたい。ロッシーニは 7 月 11 日付の手紙でボローニャの両親を安心させるべく、「こちらはすべて平静で、私たちの善良な国王が憲法に署名しました。そしてナポリ人たちが理解しがたい行動をとった、とあなたがたに断言します」と記したからである¹⁷。

ナポリが平静との言葉に一抹の真実があることは、サン・カルロ劇場が 7~8 月にも通常どおり上演を行ったことでも明らかである¹⁸。しかし、憲法採択と自由主義的運動の高揚の影響から、ほどなくサン・カルロ劇場の賭博廃止が決定されている。これに損害を被ったのが胴元の興行師バルバーイアと賭博の配当を受けるロッシーニで、ナポリでの地位喪失を予期したバルバーイアはひそかに他の都市に転出する計画を練ることになる (翌 1821 年、彼はウィーンの劇場と契約してナポリを去る)。

《マオメット 2 世》の作曲を始めていたロッシーニは、9 月半ばにローマのアポッロ劇場からの新作依頼に応じることにした (《マティルデ・シャブラン》として成立する新作は 12 月 26 日の初演が契約に盛り込まれたが、《マオメット 2 世》の遅れで 1821 年 2 月 24 日にずれ込む)¹⁹。そして 10 月 17 日付の母宛の手紙に「ぼくのオペラ《マオメット (Maometto [sic])》[の作曲]をすでに終えました。他の作品よりも悪くないのを期待します」と記したが²⁰、劇場委員会とバルバーイアは 11 月 6 日の段階で《マオメット 2 世》の初演を危ぶみ、ルイーダ・カルリーニ (Luigi Carlini, ?-?) 作曲《ソリマーノ [スレイマン] 2 世、または 3 人のスルタンの後 (Solimano secondo ovvero le tre sultane)》の上演を検討し²¹、《マオメット 2 世》の初演はカラブリア公爵夫人マリーア・イザベッラ (Maria Isabella di Borbone [La Duchessa di Calabria], 1879-1848) の聖名祝日に当たる 11 月 19 日に見送られた。ロッシーニは 11 月 7 日に送ったと推測される母宛の手紙に、「ぼくは 6 日後に上演されるオペラ《マオメット》[の作曲]を終えました。その後すぐにローマに向かって発ちます」と書いているが、謝肉祭の 1 ヶ月前のローマ入りを不可能と考えたロッシーニは劇場付きの医師フランコ・ナザーリ (Franco Nasali, ?-?) に自分が「内臓衰弱の病気 (una malattia di languore nelle viscere)」であるとの診断書を書かせ、ローマの興業師に送っている (11 月 20 日付)²³。

当時まだ《マオメット 2 世》の作曲が完全に終わっていなかったことは、11 月 28 日付でタイトルロールのフィリッポ・ガリがジョヴァンニ・リコルディに送った手紙に、ロッシーニが「まだ書き終わっておらず、今度の土曜日に上演される見込みです。でもあなたにそれを確約できませんが……」と記したことで判る²⁴。そして 5 日後の 1820 年 12 月 3 日、《マオメット 2 世》はサン・カルロ劇場で初演を迎えるのである。



全曲のピアノ独奏用編曲(リコルディ社、ミラーノ、1823 年。筆者所蔵)

【特色】

ロッシーニ 31 作目の歌劇《マオメット 2 世》は、ナポリで行ったオペラ・セーリア改革の頂点をなす名作で、ド

ラマと音楽の連続性において《オテッロ》や《エルミオーネ》を凌ぐ。これはデッラ・ヴァッレの草稿に魅せられたロッシーニが自分の豊かな経験をふまえて台本化させたことも関係しており、後にデッラ・ヴァッレは、「ロッシーニの巨大な名声と私が彼に感じた真の愛情」により、「彼が私に着想を与えたかのように」促されて台本を手がけ、「私の劇は無価値だが、彼の音楽には大変価値がある」と『劇作品と詩集 (*Opere drammatiche e poetiche*)』(1825年ナポリ刊)に記した²⁵。序曲を持たない作劇や大規模な楽曲に劇を集約する手法は《エジプトのモゼ》以後の改革の一つであり、《マオメット 2 世》は第 1 幕を五つ、第 2 幕を六つのナンバーで構成し、後述するように第 1 幕のテルツェットーネ (大三重唱)、第 2 幕フィナーレにおける劇と音楽の柔軟な構成にその革新性が表れている。

第 1 幕の導入曲〈エリッソよ、あなたの命により集まりました〉(第 1 曲)は、マオメットの軍勢に包囲された絶体絶命の状況下に始まり、エリッソのレチタティーヴォを受けて指揮官たちの歌う力強い旋律(「あなたに最初に答えるのは (*Risponda a te primiero*)」)が他の人物によって繰り返され強い印象を与える²⁶。締め括りの合唱〈そうだ、誓おう! イタリアの剣にかけて誓おう (*Si giuriam! Si giuriamo sugli'itali brandi*)〉は悲壮感を漂わせた音楽で、その愛国的な調子はヴェルディを先取りする。

完全な舞台転換を経てのアンナのカヴァティーナ〈ああ! 虚しくも悲しげな目に (*Ah! che invan sul mesto ciglio*)〉(第 2 曲)は、父と恋人を気づかって苦しむ胸の内が巧みに音楽化され、木管楽器のソロと弦楽器のピッツィカートによる伴奏と歌が対話するかのよう進行する。シェーナを挟んでのテルツェットーネ [大三重唱] 〈ああ、なんとという稲妻が (*Ohimè! qual fulmine*)〉(第 3 曲)の「テルツェットーネ (Terzettone)」はロッシーニらしい冗談めかした命名であるが、25 分に及ぶ長大さのみならず曲中で舞台転換を行う破格の構成……三重唱〈ああ、なんとという稲妻が (*Ohimè qual fulmine*)〉はアンナの自室におけるアンナ、エリッソ、カルボの驚きで始まり、大砲の音を聞いたエリッソとカルボが退出すると舞台がネグロポンテの広場になる……によっても異例である。そして女たちの合唱〈なんて不幸な! (*Misere!*)〉を受けてアンナの祈り [Preghiera] 〈正義の神よ、このような危機にあつて (*Giusto Ciel, in tal periglio*)〉が精妙な弦楽合奏とハープの伴奏で感動的に歌われ、小太鼓の音で登場したエリッソとのシェーナを挟んで三重唱〈娘よ…止めるな。急がねば (*Figlia...mi lascia. Io volo*)〉に移行する。この三重唱はテルツェットーネのカバレッタに相当するが、全体が劇の推移に沿った柔軟な構造を持ち、カバレッタであると同時に拡大形式による一個の三重唱曲となっている²⁷。

この三重唱はホ長調で終わらず、後奏の間にト長調に移行してマオメット登場のナンバーとなる。冒頭合唱〈剣により、火により (*Dal ferro, dal foco*)〉はバンダ・トゥルカ [トルコ風バンダ] を伴うエキゾチックなハ短調の序奏で始まり、続いて登場したマオメットが平伏した回教徒の兵士たちを前に、カヴァティーナ〈皆の者、立ってくれ、かくも良き日に (*Sorgete: in sì bel giorno*)〉(第 4 曲)により世界征服を宣言する。その力強く凛とした音楽は、高貴なバス歌手 [バツ・ノービレ basso nobile] の典型とされる初演歌手フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853) の壮麗な声と卓抜な技巧を前提に書かれている。

シェーナを挟んでの第 1 幕フィナーレ〈正義の神よ、これはなんとという責め苦! (*Giusto Ciel, che strazio è questo!*)〉(第 5 曲)はテルツェットーネ同様ドラマの流れに沿った柔軟な構造を備え、冒頭の三重唱〈正義の神よ、これはなんとという責め苦 (*Giusto Ciel, che strazio è questo*)〉でカルボとエリッソが旋律と音型を共有し、対立するマオメットとの違いが浮き彫りになる。マオメットが「衛兵たち、さあ、奴らを引っ立てよ (*Guardie, olà, costor si traggano*)」と命じてアンナが止めに入るところで劇的の局面が変わり、アンナの嘆願に始まるカノン風四重唱で雰囲気が一変する(伴奏に明るい音楽が聴き取れる)。そしてアレグロに転じてアンナが父とカルボの解放を要求するフィナーレ後半部は、2/2 拍子のギャロップ調のカバレッタで 4 人のソリストが華麗な技巧を駆使し、クレシェンドを交えてクライマックスを形成する。

第 2 幕は、回教徒の侍女たちがアンナを懐柔する女声合唱〈狂ってますわ、花の盛りの年齢で (*È follia sul fior degli anni*)〉(第 6 曲/導入曲)で始まる。それを拒むアンナの前にマオメットが来て愛を告白する二重唱〈アンナ…泣いておるのか? (*Anna...tu piangi?*)〉(第 7 曲)は、開始部で二人が同じ旋律を歌い継いで愛情の共有を示唆し(ハ長調、4/4 拍子、アレグロ・ジュスト)、アンナが苦しい胸の内を吐露する中間部(変イ長調、6/8 拍子、アンダンテ)で叙情的な音楽に転じ、経過部を挟んで技巧的なカバレッタで閉じられる(ハ長調、2/2 拍子、アレグロ)。これに対し、続くマオメットのアリア〈勇敢な申し出に (*All'invito generoso*)〉(第 8 曲)はドラマに沿った柔軟な構成を持ち、出陣を宣言するマオメットに通常のカバレッタを与えず、軍隊行進曲に乗せた男声合唱にマオメットとアンナを絡めて終結部とする(この軍隊行進曲は《湖の女》第 1 幕フィナーレのそれを改作したもので、次作《マティルデ・ディ・シ



マオメットのカヴァティーナの印刷楽譜
(カルリ社、パリ、1826-27年。筆者所蔵)

ャブラン》にも改作転用される)。

そして舞台が教会の地下墓所が変わり、悲しげなクラリネット・ソロの前奏に導かれてエリッソとカルボが現れる。エリッソを励ますカルボのアリア〈心配無用です：卑しい感情に (*Non temer: d'un basso affetto*)〉(第9曲)はカンタービレ〜カバレッタの定型を用い、2 オクターヴを超える広い音域 (g#-b²) と華麗なテクニックを駆使して歌われる。カルボ役を創唱したアダライデ・コメリ (Adelaide Comelli, 1794-1874. 本名アデル・ショームル Adèle Chaumel) はフランス人のコントラルトで、ソプラノ音域までカヴァーする広い音域と卓越した技巧を備え、初演の翌年偉大なテノール、ジョヴァンニ・バッティスタ・ルビーニ (Giovanni Battista Rubini, 1794-1854) と結婚した。

地下墓所で再会したアンナ、カルボ、エリッソの三重唱〈このいまわの時に (*In questi estremi istanti*)〉(第10曲)は、死を覚悟した3人の悲壮な思いがカノンを用いて切々と歌われるが、その末尾は劇の展開に即して不意に絶たれ、女たちの祈りの合唱を交えたアンナのシェーナを挟んで第2幕フィナーレ(第11曲)となる。これは実質的にアンナのアリア・フィナーレと理解しうるが、ドラマに沿って柔軟かつ複雑な構成を持ち、祈りのシェーナから間断なく続く前半部は女声合唱〈不幸なお方！あなたに残されたのは逃げることだけ (*Sventurata! fuggir sol ti resta*)〉〜アンナのレチタティーヴォ〜女声合唱を伴うアンナのアリア〈近づく死は (*Quella morte che s'avanza*)〉(ハ長調、6/8拍子、アンダンティーノ)から成る。後半部は回教徒の兵士たちの合唱〈無駄だ、裏切り女 (*Invan la perfida*)〉(3/4拍子、アレグロ)に始まり、アンナが決然として「刺しなさい (*Si, ferite*)」と言い放つ部分から実質的にアンナの二つ目のアリアとなる。これは超絶技巧のアジリタを駆使する開始部(ホ長調、3/4拍子、アレグロ)、叙情旋律に豊かな装飾を織り込む〈お母さま、天国のあなたに (*Madre, a te che sull'Empiro*)〉(ト長調、アンダンティーノ)を経て、マオメットの登場でいきなりドラマが加速し、アンナの自害を頂点に彼女の死を悼む合唱で締め括られる(ハ長調〜ホ長調、4/4拍子、アレグロ)。

アンナ役はサン・カルロ劇場の絶対的なプリマ・ドンナにしてすでにロッシーニの恋人となっていたイザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran, 1784-1845) のために作曲されたが、当時喉の不調に苦しむ彼女には歌い切れぬほどの過激な歌唱技巧を求め、僅か9回で上演を打ち切られる一因となっている(⇒上演史)。なお、エリッソ役の初演歌手アンドレア・ノツァーリ (Andrea Nozzari, 1775-1832) はロッシーニのナポリ時代の最も重要なテノールであるが、この作品では一つのアリアも与えられていない。これもまた異例であるが、すでにロッシーニの理解者となっていたノツァーリがプリモ・テノールとしての要求を控えたのであろう。ちなみにコンドゥルミエーロとセリモは脇役で、本作の重要テノールはエリッソのみ。ナポリにおけるロッシーニのオペラ・セーリアは3人のテノールを起用した《イングランド女王エリザベッタ》(1815年)に始まり、《アルミーダ》(1817年)まで3人のテノールが男性役の要をなしたが、《エジプトのモゼ》では主役モゼと準主役ファラオーネをバスに与え、《マオメット2世》により初めてソプラノ、コントラルト、テノール、バスが対等に主役とされている。

【アンナの自死と《マオメット2世》の歴史的意義】

フィナーレ幕切れに舞台でヒロインを自死させた点も異例中の異例と言える。ロッシーニは《オテッロ》(1816年)においてオテッロがデズデーモナを舞台上で刺殺し、最後にみずから命を絶つ悲劇的結末を採用したが、大罪である自殺をオペラで描くことは当然のことながら劇場検閲に抵触し、《オテッロ》も《マオメット2世》も他の都市の再演ではヒロインの死なないハッピーエンド改作を余儀なくされた。オテッロの自害に関しては異教徒＝野蛮人の行為とする弁明も成り立つが、キリスト教徒のアンナはそうではない。では、なぜ《マオメット2世》でアンナの自死が許されたのだろうか。

デッラ・ヴァッレのオリジナル台本では、胸を刺したアンナが母の墓にもたれて最後の台詞——「そして、イタリアを…征服すると…うぬぼれた…あなたは、いま教わるのです…一人のイタリア娘から。祖国がまだあの英雄たちのものであると (*E tu che Italia...conquistar...presumi... / Impara or tu...da un'Itala donzella / Che ancora degli eroi la patria è quella*)」——を語り、死んで墓の足元に倒れる運びになっていたのに対し、ロッシーニの総譜では設定と歌詞を変えてアンナがマオメットに母の墓を示し、「母の遺灰の上で、私は彼[カルボ]に手を差し伸べました。母の遺灰が私の血を拾います (*Sul cenere materno / io porsi a lui la mano, / il cenere materno / abbia il mio sangue ancor*)」と言って胸を刺し、周囲の驚きと痛ましい合唱で劇を閉じるよう変更されている。その結果、アンナが父から与えられた短剣で自害して父との約束や市民としての義務を果たすだけでなく、みずからの意思で亡き母への約束(アンナが母の墓前で無言のうちに、マオメットへの罪深い愛を消すためにみずから命を絶って母のもとに行く)と誓ったことは、その後の歌詞で明らかになる)を果たすことで、より高貴なヒロインに高められているのだ。それゆえ異教徒のマオメットを拒否し、祖国と義務に殉じたキリスト教徒の気高い行為としてこれが認められた可能性もあるが、印刷台本と実際の上演の関係も含めて当時のナポリの劇場検閲の研究なしには答えの出せない問題と言える²⁸。

その後ロッシーニはローマ初演の《マティルデ・ディ・シャブラン》(1821年)、ナポリ初演の《ゼルミーラ》

(1822年)、ヴェネツィア初演の《セミラーミデ》(1823年)をもってイタリアでの活動に終止符を打つ。古典的構成に戻った《セミラーミデ》を別にすれば、《マオメット 2 世》は《ゼルミーラ》と共に改革的オペラ・セーリアの最後に位置し、その特色はフィリップ・ゴセットが明確に述べているように、主題の変形を用いての劇と音楽の統一性(とりわけ導入曲)、ドラマの連続性を保持する大規模な楽曲構成の確立(とりわけテルツェットーネ)、ロンドや定型的カバレッタの形式をしりぞけた自由な展開などの柔軟な構造にある²⁹。最後に、本作の意義に関するゴセットの文章を引用しておこう——「ロッシーニのオペラ・セーリアの最高の業績の一つである《マオメット 2 世》に、私たちは心に直接的に訴えかける音楽と輝かしい声楽と同時に、音楽とドラマの構造への熟慮と深い理解に対する卓越した才能を見出す。その改訂版《コリントスの包囲》よりも遥かに統一性のとれたこのオペラは 19 世紀イタリア・オペラの鍵となる作品であり、彼が数年後にイタリア・オペラ作曲家としてのキャリアを終えなければさらに追求したであろう方向性の明確なヴィジョンを私たちに与える作品である」³⁰

【上演史】

1820年12月3日ナポリのサン・カルロ劇場で行われた初演は、必ずしも成功とはいえなかった。『両シチーリア新聞』(1820年12月6日付)の批評は台本をメタスタージオやアルフィエーリと比較して褒め、ロッシーニに関しても「彼がこの新たな道を進み続ければ、《マオメット 2 世》は彼のオペラの経歴において、第一期よりもさらに栄光に満ちた第二期[の始まり]を告げるものとなるだろう」と評価し、歌手たちについても高い評価を下した³¹。けれども初演は合計9回で打ち切られる。原因がコルブランの喉の不具合にあることは、1821年1月18日の上演の2日後にバルバーイアが王立劇場の総監督に対し、コルブランの喉の不調が続いて医者からの診断からも本日以降の出演は難しい、と報告したことで判る(1821年1月21日付)³²。ロッシーニの不在もあり(初演後ほとんどナポリを離れてローマ入りし、1821年3月初めまで同地に滞在した)、バルバーイアはある段階で演目を外すことを決意したのであろう。官報に等しい『両シチーリア新聞』の批評とは異なり、観客の受けが良くないことを自覚するロッシーニは、最初の再演となるヴェネツィアのフェニーチェ劇場1823年謝肉祭シーズン(1822年12月26日初日)のために大幅な改作を施した。主な変更は、序曲(シンフォニア)の追加、アンナのカヴァティーナ(第2曲)の削除、アンナ、カルボ、エリッソの三重唱(第10曲)のカルボ、エリッソ、マオメットの新たな三重唱への差し替え、《湖の女》のロンド・フィナーレを改作転用してのハッピーエンド採用であるが、これにより音楽とドラマの双方で初演版の革新性は失われてしまった。

その後ロッシーニの関与しない再演が1823年にヴィーン(ドイツ語版。初日は1月22日)、1824年にミラーノのスカラ座(初日は8月16日。15回上演)で行われたが、スカラ座上演の批評の一つは、「なかなか良い台本」「興味深く、情趣豊かな劇的狀況に欠けていない」としながらも「管弦楽の重さ」と「単調さ」を指摘し、「最初から最後までレチタティーヴォを管弦楽伴奏で作曲した重々しさ」を嫌う聴衆が第1幕と幕間バレーのみで劇場を後にした、と記している(『ヴァリエタ・テアトラリ(Varietà Teatrali)』1824年第9号)³³。こうした不評は、《マオメット 2 世》の革新的な作劇と重厚な音楽が同時代の聴衆の理解を超えたものであったことの証でもある。そしてロッシーニがフランス語のトラジェディ・リリックに改作した《コリントスの包囲(Le siège de Corinthe)》を1826年10月9日にパリのオペラ座[王立音楽アカデミー劇場]で初演し、その各国語版が流布したため、オリジナルの《マオメット 2 世》は1826年10月のリスボンと1827年7月のバルセロナ上演を最後に消え³⁴、以後150年以上も忘れられることになった³⁵。

復活上演は1985年8月19日にロッシーニ・オペラ・フェスティバルで行われ(ロッシーニ劇場。ピエル・ルー



《マオメット 2 世》の 1985 年 ROF 復活上演、1993 年 ROF、2008 年 ROF、2008 年 ROF 来日公演の日本初演プログラム

ジ・ピッツィ演出、クラウドディオ・シモーネ指揮。マオメット：サミュエル・レイミー、アンナ：チェチーリア・ガスティア他)³⁶、同フェスティヴァルでは1993年8月(ピッツィ演出の再演、ジャンルイーダ・ジェルメッティ指揮。マオメット：ミケーレ・ペルトウージ)、さらに2008年8月に上演されている(ミハエル・ハンペの新演出、グスタフ・クーン指揮。マオメット：ミケーレ・ペルトウージ)。日本初演は同フェスティヴァルの来日公演として2008年11月15日に大津・びわ湖ホールでなされた(ハンペ演出、アルベルト・ゼッダ指揮。マオメット：ロレンツォ・レガッツォ。一連の上演はクラウドディオ・シモーネによる批判校訂版の第一次校訂譜を使用)。1822年ヴェネツィア改訂版の蘇演は2002年7月17日に「ヴィルトバートのロッシーニ」音楽祭で行われた。近年の重要公演に2012年7-8月ニューメキシコのサンタ・フェ・オペラがあり、Hans Schellevisの新批判校訂版が初使用されている(デヴィッド・オールデン演出、フレデリック・シャスラン指揮。マオメット：ルーカ・ピザローニ)。これは1985年に成立したシモーネ校訂版を不十分とするフィリップ・ゴセットがより広範な二次的楽譜素材を加えて作成させたもので、2015年にバーレンライター社から出版予定となっている。

推薦ディスク

- ・初演版 RICORDI RFCD 2021 (3CD) (海外盤。廃盤)

1993年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル ジャンルイーダ・ジェルメッティ指揮シュトゥットガルト放送交響楽団、プラハ室内合唱団。マオメット：ミケーレ・ペルトウージ、アンナ：チェチーリア・ガスティア、エリッソ：ラモン・ヴァルガス、カルボ：グローリア・スカルキ他



- ・ヴェネツィア稿 TDK コア TDBA3014 (国内盤。日本語字幕付)

2005年2月ヴェネツィア、フェニーチェ歌劇場上演 ピエル・ルイーダ・ピッツィ演出、クラウドディオ・シモーネ指揮フェニーチェ歌劇場管弦楽団、同合唱団。マオメット：ロレンツォ・レガッツォ、アンナ：カルメン・ジャンナッタージオ、エリッソ：マキシム・ミロノフ、カルボ：アンナ・リータ・エンマベッラ他



- 1 題名は「Maometto II」とも表記されるが(例：ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演プログラム)、本稿は初版台本に準拠した。
- 2 生年を1776年もしくは1778年とする文献もあるが、最新の文献の多くは1777年を採用している。
- 3 初版台本では役名にMaometto secondoではなくMaometto IIを採用。
- 4 イタリア語読みでは「セリモ」だが、劇中で発音されず、自筆楽譜にはSelim(セリム)とも書かれているので、本稿ではトルコ側の人物としてセリモとした。なお、《アディーナ》の登場人物Selimoは劇中での発音に合わせてセリモとなる。
- 5 Rescigno, Eduardo., *Dizionario Rossiniano*, Biblioteca universale Rizzoli, Milano, 2002., p.722.
- 6 参考までに次に掲げるが、ロッシーニの楽曲区分と合致しないことをお断りしておく。
 - a) シェーナ(いいえ、黙ってはいられません(*No, tacer non deggio*)) (アンナ、エリッソ)
 - b) 三重唱(ああ、なんとこの稲妻が(*Ohimè qual fulmine*)) (アンナ、カルボ、エリッソ)
 - c) 祈り[Preghiera](正義の神よ、このような危機にあつて(*Giusto Ciel, in tal periglio*)) (アンナ、合唱)
 - d) シェーナ(ああ、お父様! (*Ahi, padre!*)) (アンナ、エリッソ)
 - e) 三重唱(娘よ…止めるな。急がねば(*Figlia...mi lascia. Io volo*)) (アンナ、カルボ、エリッソ)
- 7 参考までに次に掲げるが、ロッシーニの楽曲区分と合致しないことをお断りしておく。
 - a) シェーナ(まだ完全になされていない(*Compiuta ancora del tutto*))と合唱(陛下、新たな喜びの報せを(*Signor, di liete nuove*)) (マオメット、セリモ、合唱)
 - b) シェーナ(近くに來るがいい、ああ、勇者たちよ(*Appressatevi, o prodi*))と三重唱(正義の神よ、これはなんとこの責め苦(*Giusto Ciel, che strazio è questo*)) (カルボ、エリッソ、マオメット)
 - c) 第1幕フィナーレ(衛兵たち、さあ、奴らを引っ立てよ(*Guardie, olà, costor si traggano*)) (アンナ、カルボ、エリッソ、セリモ、マオメット、合唱)
- 8 1985年と93年ROFプログラムはN.10冒頭シェーナ(ああ、なんと甘く心に(*Oh, come al cor soavi*))をN.9の終わりに置いたが、2008年プログラムで変更された。
- 9 第1幕ファラオーネのアリア(眼からうろこが落ち(*Cade dal ciglio il velo*))(N.4)を新たに作曲してミケーレ・カラーファ作曲のアリア(N.4a)と差し替え。初日は3月1日で合計5回上演。
- 10 関連するカルロ・カラーファ・ディ・ノーヤの最初の書簡は1820年2月15日付(Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I, 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, 1992., pp.408-409. [書簡194])。
- 11 op.cit., p.408., n.3. やブルーノ・カーリ論文(次註)ではカルロ・ルイーダ(Carlo Luigi)と誤記。
- 12 Bruno Cagli, *Maometto o del Sentir tragico*. [Programma del ROF 2008., pp.29-43.], p.30.
- 13 *Lettere e documenti*, I, p.417. [書簡201]
- 14 実在のエリッソ、カルボ、ボンドウミエールの略歴は *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol.43(1993), vol.16(1973), vol.11(1969)の該当項目参照。ネット版は次のとおり。
[http://www.treccani.it/enciclopedia/paolo-erizzo_\(Dizionario_Biografico\)/](http://www.treccani.it/enciclopedia/paolo-erizzo_(Dizionario_Biografico)/)
[http://www.treccani.it/enciclopedia/giovanni-calbo_\(Dizionario_Biografico\)/](http://www.treccani.it/enciclopedia/giovanni-calbo_(Dizionario_Biografico)/)

-
- [http://www.treccani.it/enciclopedia/giovanni-di-antonio-bondumier_\(Dizionario-Biografico\)](http://www.treccani.it/enciclopedia/giovanni-di-antonio-bondumier_(Dizionario-Biografico))
- ¹⁵ カラーファ・ディ・ノーヤのフェルディナンド・グイッチャルディーニ宛の手紙、1820年7月4日付。 *Lettere e documenti*, I, p.423. [書簡 206]
- ¹⁶ 1812年に国民議会によって発布され、王政復古でフェルディナンド7世によって無効とされた自由主義的憲法の復活を求めて1820年1月1日深夜に起きた反乱を発端とする運動で、同年3月にはフェルディナンド7世もその復活を容認した。
- ¹⁷ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.265-266. [書簡 III.a.146]
- ¹⁸ 7月6日にボワエルデュー《バグダッドのカリフ》を1回上演、7月16日からカラーファ《ガブリエッラ・ディ・ヴェルジ》を合計9回、7月30日からメルカダント《サモのアナクレオンテ》を14回上演。
- ¹⁹ 《マティルデ・シャブラン》の成立過程は、別稿《マティルデ・ディ・シャブラン》作品解説で明らかにしたので省略する。
- ²⁰ *Lettere e documenti, IIIa.*, p.271. [書簡 III.a.150]
- ²¹ これに関するドキュメントは、 *Lettere e documenti.*, I., pp.439-444. [書簡 218-222]を参照されたい。
- ²² *Lettere e documenti, IIIa.*, p.273. [書簡 III.a.151]
- ²³ *Lettere e documenti, I.*, p.446. [書簡 224]
- ²⁴ *Ibid.*, p.449. [書簡 227]
- ²⁵ Cagli, *op.cit.*, p.34.
- ²⁶ その旋律は後に《ランスへの旅》フィナーレのコーリナへの即興歌《金の百合の陰で (*All'ombra amena del Giglio d'Or*)》の間部「*Della corona sostegno*」に再使用される。
- ²⁷ 序奏（二長調、4/4拍子）、アンナとエリッソのシェーナ〜プリモ・テンポ（ロ長調、アレグロ・ジュスト。女声合唱を伴うエリッソとアンナの二重唱）〜テンポ・ディ・メツ（ト長調、3/4拍子、アンダンティーノ。カルボのソロで始まり、アンナ、エリッソ、女声合唱による美しいアンサンブル）〜第二のテンポ・ディ・メツ（4/4拍子、アレグロ。アンナとエリッソによる経過部）〜セコンド・テンポ（ホ長調、ピウ・モツ。華麗なテクニックを駆使するカバレッタ）から成る。
- ²⁸ 前記カーリ論文は、デッラ・ヴァッレのオリジナル台本とロッシーニ自筆楽譜の違いを明らかにした上で、印刷されたテキストではアンナが神（cielo）に許しを求める祈願「あなたのお許しを、神さま、汚名と死の狭間で私が死を選び、みずから自分を殺めても、私をお許してください」で閉じるとする。けれども「印刷されたテキスト」の出典を記しておらず、オペラの初版台本にも掲載されていない。この問題は当時のナポリの劇場検閲とも深い関わりがあり、王政復古の前後5年間の検閲規則研究なしに答えを出すことはできない。
- ²⁹ 《マオメット2世》筆写譜ファクシミリ版のフィリップ・ゴセットによる序文（Garland, New York & London, 1981., vol.I.）。
- ³⁰ 《マオメット2世》のCD（Philips 412 148-2）ライナーノーツ p.11.
- ³¹ 2005年フェニーチェ劇場《マオメット2世》上演プログラム p.121.及び *Lettere e documenti*, I., p.459., n.3の引用より。
- ³² *Lettere e documenti*, I., p.456. [書簡 232]
- ³³ 批評の引用部分は AA.VV., *Le recezione di Rossini*, Roma, Accademia nazionale dei Lincei, 1994., p.274.に掲載。
- ³⁴ 1827年バルセロナ上演を《コリントスの包囲》のイタリア語版とする文献は誤り。
- ³⁵ 《コリントスの包囲》は舞台をネグロポンテからコリントスに移し、マオメット以外の人物名や設定を変更した点でも《マオメット2世》とは別作品で、そのイタリア語ヴァージョンも同様である。
- ³⁶ これに先立ち1983年12月ロンドンにて、クラウディオ・シモーネ指揮の商業用録音が行われた（前記 Philips 盤）。